

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-190	15-071	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
Which substance is most dangerous? Perceived harm ratings among students in urban and rural Norway. ノルウェーの大学生における嗜好品・薬物による健康面への危険度認識		
執筆者		
Willy Pedersen, Tilmann von Soest		
掲載誌		
Scandinavian Journal of Public Health, 2015; 43: 385-392. doi: 10.1177/1403494815576267.		
キーワード		PMID
アルコール、喫煙、大麻、認識		25816858
要 旨		
目的： この研究ではノルウェーの都市部にある Oslo 大学と地方にある保守的かつ宗教的な Coastal 大学の学生間で薬物、嗜好品に対する危険性認識を調査することを目的とする。		
方法： 458名の大学生を対象とし、タバコ、アルコール、大麻の使用と身体的悪影響、精神的悪影響、依存性、怪我、社会的問題との関連の認識性を質問紙法にて調査し、それぞれ6段階にスコア付けした。解析には分散分析、多変量解析を使用し、薬物・嗜好品の種類、性別、大学に関して交互作用を検討した。		
結果： Oslo 大学の学生は全体として大麻よりアルコールのほうが有害だと認識していたが、Coastal 大学の学生ではその反対であった。両大学の学生において、身体的悪影響に関してはタバコ、怪我に関してはアルコール、精神的悪影響に関しては大麻がもっとも高スコアであった。タバコ、アルコール、大麻の使用の有無は有害性認識の低下と関連していて、特に大麻において顕著であった。		
結論： ノルウェーの大学生の嗜好品・薬物に対する認識は、先行研究で報告されているノルウェー一般住民の認識と異なっていた。特に大麻の有害事象に対する認識は低く、特に都市部にある Oslo 大学の学生において顕著であった。		